

博士學位論文審査等報告書

審査委員 主査 三橋俊雄
副査 大場 修
副査 檜谷美恵子
副査 福井 亘

1 氏 名

陳 譽云

2 学位の種類

博士 (学術)

3 学位授与の要件

学位規程第3条第3項該当

4 学位論文題目

日本統治時代から現代に至る台湾の竹具・竹産業に関する研究

5 学位論文の要旨および審査結果の要旨

【学位論文の要旨】

別紙に記載

【論文目録】

別紙に記載

【審査結果の要旨】

本論文は、日本統治時代（日治時代）から戦後、現代に至る台湾における竹の産業的・経済的価値について検討し、さらに、竹工芸技術から竹の精神的文化までを視野に入れ、日本統治下における、あるいは、戦後の近代化のうねりの中で、竹という素材がいかに位置付けられ、また変容してきたかについて検討した。その結果、日治時代には台湾の産業発展に不可欠な自然素材として竹が利活用され、一方、現代においても、台湾の通過儀礼、年中行事などにおける非日常の場で、竹の象徴的・

精神的価値が息づいていることを確認することができた。

第1章では、中国の文人蘇軾の詩を引用して、精神的象徴としての竹、生活に不可欠な素材としての竹の価値を示し、また、その多様な竹具の利活用について、竹の稗が建築材や籠類に、枝は箒に、葉は屋根葺き材や粽の皮に、竹根は楽器や占いの道具に、実竹は印鑑の材料にと、竹のすべての部材がさまざまな用途に使い尽くされる「一物全体活用」の観念を明らかにした。関連する既往研究としては、台湾における竹具・竹資源、伝統的竹造家屋、竹工芸文化、竹工芸産業などの研究をあげ、個々に、竹具に関する道具学的・民俗学的考察や、建築学からの視点、竹工芸に関する歴史・技術論的な検討、竹工芸伝習所などの工芸教育、竹工芸産業における政策的側面からの論考はなされているものの、台湾における多様な竹素材を対象として日治時代から現代までを視野に入れた生活文化的、生活技術的視点からの言及はなされていないことを概観し、本論文の独自性を明らかにした。

第2章では、かつて生活用具の素材として多用されてきた竹が、産業技術や生活様式の近代化の中で他素材に代替されつつある現代において、伝統的竹具に焦点を当て、その素材のもつ特質をいかに見極めながら生活用具や家具、建築材料等に生かし利用されてきたかを、生活文化的・道具学的側面から検討した。

調査対象地域は、竹の代表的産地とも言える台湾・南投県南西部の竹山地域において、竹利用の長い歴史を有し竹と生活の繋がりが今も息づいている6集落を選定し、概略調査した後、本研究の調査集落を大鞍里（海拔600m以上）、田子里（海拔約200m）の2地域にしぼり、詳細な調査を行った。両集落において、竹に関わる生活文化・生活技術を長年実践し熟知している住民にインタビュー調査を実施し、さらに調査した6集落に現存する79種類（計114点）の竹具を採集・整理した。

これらの竹具とインタビューデータを解析した結果、竹具に見る伝統的な価値としての「適材適所」「地産地消」「技の探求」「一物全体活用」「象徴性・真正性」についての特質を導出することができた。すなわち、当該地域における竹と生活文化・生活技術の関わりにおいて、自然や風土に働きかけ、合理的で最適な竹素材の利活用方法を求めるものづくりの理念を明らかにすることができた。

第3章では、竹資源に関連する日本統治時代の台湾総督府史料・研究報告・関連記事・書籍等を通して、当時の台湾にとって重要な自然資源であった竹に着目し、竹具・竹産業政策の実態を考察し、日治時代における竹の産業的価値について検討した。具体的には、台湾総督府の政策について、竹材産出量や竹産物生産額などの資料から竹資源の産業的位置付けを行い、また、大規模竹材製紙業の模索、竹細工生産の推移、竹材工芸伝習所の設置、副業と造林政策、代用品としての竹などにつ

いて検討した。その結果、農村の副業手段、竹製バナナ籠としての需要、竹工芸技術、製紙材、鉄筋材の代用としての利用など、日治時代における台湾の発展に関わる竹の産業的価値について明らかにした。

加えて、日治時代における台湾の経済的発展の背景としては、台湾の中期統治政策上の主張であった本土と同様の制度を植民地である台湾に適用する「内地延長主義」の考えが作用してきたことが挙げられ、その発展過程において、竹の産業的価値が一定の役割を果たしてきたことが確認された。

第4章では、台湾における戦後の竹産業の実態を把握するために、その前提となる社会環境的要因としての台湾経済の発展過程について概観し、特にプラスチック産業の勃興・発展経緯やそれがもたらした竹産業への影響、輸出用の竹製バナナ籠生産の推移などを検討し、戦後台湾の殖産興業政策ならびに経済発展の影響下における竹産業の変容について明らかにした。

また、台湾に於いて儀礼・祭礼に用いられてきた竹具の利用実態を調査し、竹が機能的側面のみならず精神的側面からも人びとの生活世界を支える重要な役割を担ってきたことを明らかにした。すなわち、竹が有する象徴的・精神的価値は、古代から現代に至っても、とりわけ台湾の非日常の生活場面において継承され利用されてきたことを確認した。

本論文は、台湾においてかつて生活に不可欠であった竹素材に着目し、「竹と生活・社会」の結びつきを、日本統治時代から戦後、そして現代に至る時間軸のなかで、特に、竹に関わる生活文化、生活技術、産業的価値、竹具の変容などについて、文献史料調査・現地実態調査などを通して、民俗学的・道具学的視点から、その特質を明らかにしたもので、学位論文として価値あるものと判断した。

6 最終試験の結果の要旨

平成27年2月16日午前10時45分より図書館視聴覚室において博士学位論文発表会を公開で行った。口頭発表後、質疑応答が行われた。質問内容は、竹細工の遊び・デザイン性、竹具の装飾性など、今後の課題として産業史で扱われた竹が現代の竹具にどのように影響しているかなど多岐にわたり、概ね適切に回答した。最終試験の結果については、審査員全員一致で合格とした。